

アムスルだより

No.43 2000年 5月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



刺したり突っぱたり

-ウニの棘(とげ)-

ずいぶん暖かくなってきました。2月には21ぐらいたった海の水温も、23をこえる日が続いています。春から今ごろの時期は、昼間に潮がよくひくので、海に行くと貝やタコをとった人も多かったのではないのでしょうか。そうした人の中には、以前アムスルだより(No.24)でとり上げたウニの仲間、ナガウニを見た人も多いことでしょう。きっと、そのときナガウニは、岩のへこみや死んだサンゴのすき間に入り込んでいたと思いますが、そうしたウニを手でとろうとすると、トゲが痛くてなかなかうまくいきません。「身を守る」というトゲの役割からすると、これで大成功なわけです。今回は、このトゲを使ったウニの身の守り方について、すこしお話ししましょう。

先日、研究のためにマエノハマでナガウニをとりました。ここのサンゴは、おととしの白化現象はっかげんしょうでずいぶんたくさん死んでしまったのですが、ナガウニは、その死んだサンゴの骨の間などに入り込んでおり、しかも“管足”かんそくの吸盤きゅうばんをつかって、強

い力ではりついています。おまけに、トゲをまわりの岩やサンゴの死骸しがいにつっぱっているの、たとえば魚がこのウニを食べようとしても、トゲがじゃまになるし、引っぱり出そうにもトゲでつっぱられていては、そうもできません。ナガウニは、体をおおうトゲを武器(またはよろい)として用いると同時に、つっぱり棒として使って、自分の身を守っているのです。

まわりにじゃまになるものがなく、ちゃんとかむことができれば(そして、少し痛いのをガマンすれば)、ナガウニを手でとることもできないことではありませんが、さすがにガンガゼは無理です。クシバルの礁池の中には、平らなひらけたところにガンガゼのたくさんいる場所がありますが、みなさんも知っているとおり、このウニの体は鋭いトゲだらけで、とてもつかむことなどできません。ガンガゼのトゲは、人の皮ふなど簡単につきとおしてしましますし、おまけにもりやつり針のようにかえしがあるので簡単には抜けません。そして細長くて折れやすく、ささるとそこで折れてトゲのかけらが皮ふの中に残ってしまいます。始末の悪いことに、さらに毒まであるものだから、もうふんだりけったりです。このように、ガンガゼは、トゲを武器として特別に進化させたウニと言えるでしょう。このウニに手を近づけると、

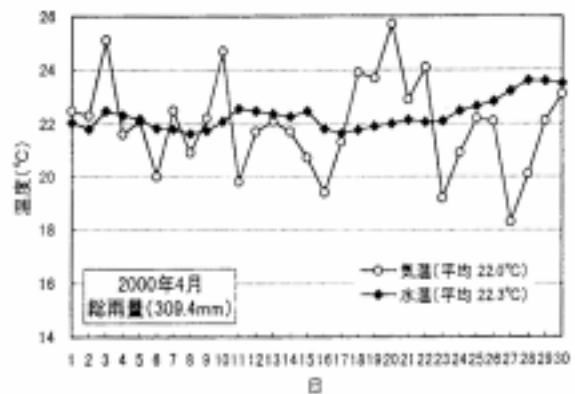
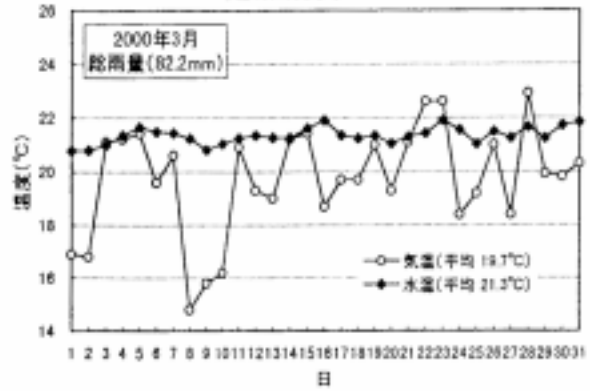
光の変化を感じるのでしょうか、トゲをさかんにふり動かしはじめます。まるで「さすぞ」とおどしているようです。せっかくそうやって知らせてくれているのですから、みなさんもこのウニにはさわらないよう十分に気をつけてください。

一方、トゲをつっぱり棒として進化させたウニもいます。パイプウニです。このウニは、比較的波あたりの強いところにすんでいて、クシバルのリーフエッジなどでよく見かけます。このウニのトゲは赤茶色で太く大きく、先は丸くて、さすがにこのトゲでは、敵をさすことはできません。けれどそのかわりに、かなづちでたたかないと折れないくらい丈夫なので、つっぱり棒としてはとてもすぐれていて、岩の奥でトゲをつっぱっているこのウニを引っ張り出すことは、まず不可能です。自分のトゲが武器としては役に立たないことを知っているのでしょうか、昼間このウニは岩かげにじっとかくれており、夜になると表に出てきてはい回りはじめます。こうなると、わりと簡単にとることができます。

これらのほかにも、ブンブクという変な名前のウニもいて、このなかまは砂の中であらしているせいか、そのトゲはとても小さなものです(ちなみに、阿嘉島ではウリザネブンブクという種が見つっていますが、生きているこのウニが報告されたのは、これが世界で2番目だそうです。このウニのトゲは、ブンブク類としてはやや長めです)。

このように同じウニのなかまでも、トゲの形などその姿はさまざまですが、それは意味のないものではなく、それぞれの場所でその姿にあった生活をしているのです。

定点観測



阿嘉島の海より

-サンゴの産卵予想-

過去の研究結果から、毎年5・6月に産卵するミドリイシ属サンゴの産卵日は、3月1日以降の22以上の水温を積算した値が高いほど早くなることが分かっています。今春は水温が低い傾向にあったため(4月の平均水温は過去11年間と比較して0.6低い値でした)、これから水温が例年通りに上昇したとしても、今年最初のミドリイシの産卵は5月18日の満月から6~8日遅れることが予想されます。また、現時点で成熟に達したと思われるミドリイシは約1割しかなく、これから増えても、5月にはおよそ2割弱のミドリイシしか産卵せず、多くは6月17日の満月の頃に産卵するものと予想されます。研究所では今年も産卵データを集めていますので、皆さまのご協力をお願いいたします。